

# 月刊ウィーン

現地オリジナル取材と編集で  
ウィーンを伝える月刊情報紙  
創刊 26 年目  
創刊 1989 年 Nr. 300

## GEKKAN-WIEN 2014年6月号





# 杉本純の原子力の話 II ウィーンと京都 33



四月二日、原子放射線の影響に関する国連科学委員会(UNSCEAR)による「二〇一二年東日本大震災後の原子力事故による放射線被ばくのレベルとその影響」と題する報告書が



した集団のがん発生率への影響は小さいと予想されるとし、これは日本の当局が事故後に講じた迅速な防護措置に拠るところが大きいとしている。

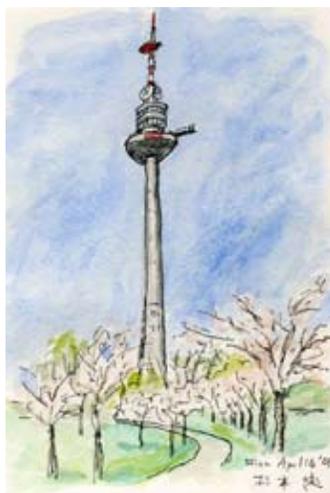
四月二日、原子放射線の影響に関する国連科学委員会(UNSCEAR)による「二〇一二年東日本大震災後の原子力事故による放射線被ばくのレベルとその影響」と題する報告書が発表された。報告書では、福島原発事故の結果として生じた放射線被ばくにより、今後がんや遺伝性疾患の発生率に識別できるような変化はなく、出生時異常の増加もないと予測している。その一方、最も高い被ばく線量を受けた小児の集団においては、甲状腺がんのリスクが増加する可能性が理論的にあり得ると指摘し、今後、状況を綿密に追跡し、更に評価を行う必要があると結論づけている。報告書では、様々な集団の被ばく線量の慎重な推定と放射線被ばくを受けた後の健康影響に関する科学的知見に基づいて解析を実施し、対象と



我が国の派遣団

した集団のがん発生率への影響は小さいと予想されるとし、これは日本の当局が事故後に講じた迅速な防護措置に拠るところが大きいとしている。

世界十八ヶ国・五国際機関から百十名以上の専門家が五グループに分かれて福島原発事故に伴う放射線被ばくの影響を解析する作業に取り組み報告書を作成した。我が国からは、放射線医学総合研究所の米倉理事長を始め、十四名の専門家が二〇一二年一月、ウィーンにおける第11回UNSCEAR専門家会合以来参加した。筆者も放射性物質の放出と拡散に関するグループに属し、事故の進展、環境への放射性物質の放出挙動を中心に技術アドバイザーとして参加した。全三二ページに及ぶ「科学的附属書」と題する科学的根拠を詳述した報告書の作成には、く部担当しただけだったが、非常に勉強になった。さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の有名なタワーについて述べたい。ウィーンのドナウ公園にあるドナウタワーは、一九六四年四月にオープンし、高さは、三二メートルとウィーンで最も高い建物である。地上二六〇及び二七〇メートルにそれぞれある回転式展望カフェ及びレストランからは、旧市街やウィーンの森など見事なパノラマを一望できる。また、一五〇メートルには展望用テラスとバンジージャンプ用の台がある。原子力機構ウィーン事務所ビル



テナス場、ミニ列車などがあり、市民の憩いの場となっている。一九九六年のオーストリア建国千年祭を記念して、日本からウィーンに寄贈した千本の桜が植えられている。

一方、一九六四年十二月にオープンした京都タワーは、二三メートルと京都で一番高い建物である。地上二〇〇メートルの展望室から市街を一望できる。独特な姿は海のない京都の街を照らす灯台をイメージしている。東京タワーなどと違い鉄骨を一切使わず、特殊鋼板シリンドラーを溶接でつなぎ合わせ円筒型としている。当時、設計依頼を受けた京大建築学教室では、京都タワーと京都タワービルを一連の架構と考え、この種の大規模タワーでは我が国で初めてこの構造を採用した。瞬間風速五〇メートル/秒を超える台風や震度五強の阪神大震災を経験したが損害はなく、安全性の高さを証明した。両タワーは市民に親しまれるとともに、奇しくも今年、ともに五〇周年を迎える。

余談であるが、筆者はウィーン赴任中、何度かドナウタワーのレストランで眺望を楽しみ、毎日曜日にはドナウ公園の芝生でソフトボールの練習をした。京都タワーには大学入学時に両都に住む親戚に案内してもらった。両市の有名なタワーに接することができた幸運に感謝しつつ、ドナウタワーを描いたスケッチを掲載させていただく。

■杉本純 京都大学教授  
元原子力機構ウィーン事務所長